

Wat00040 <Journalism Inside2>全国紙・東京紙・大阪紙・・・

#0000 dando 8809171349

<Journalism Inside2>全国紙・東京紙・大阪紙・・・

by 大阪科学部・団藤

次の関連発言は、<Journalism Inside> マスコミと地域土着問題の続編です。できれば、ひとまとめでお読み下さい。ここでは、現在の全国紙編集のありかたを、わたしの体験を通じて紹介しようと思います。これは現状の姿ですから、いいも悪いもありません。歴史的に随分の時間を経て、「ヒト」に染み付いている現状を変えるのは、新聞社の経営陣でもそんなに簡単なことではありません。

東京の紙面には地方のニュースは事件、事故などたった5種しか載らない—と言ったのは堺屋太一さんでした（原子力発電ボードのNo. 19にそのサワリが引用してあります）。この関連発言はそれについての、マスコミの内部からの報告でもあります。No. 19も併せてお読みいただければと思います。

#0001 dando 8809171351

地方紙に対して全国紙とは、本当に何だろう？

by 大阪科学部・団藤

作家の堺屋太一さんの表現を借りると、地方のニュースで、東京の新聞に載るのは、事件、事故、選挙、スポーツ、伝統行事の5種がほとんどで、これ以外は、のぼり記事と言われて書くのが恥になる—そうです。情報の発信機能が東京に集中して、地方が発信できない現状、それが東京にとっても地方にとっても不幸であると指摘されています。

わたしはこの5年間、大阪を拠点に仕事をし、記事を書いてきました。その体験からすると、堺屋さんの見方はちょっとオーバーではあっても、見当はずれではないと思います。わたしは、科学部なので、全国に通用するニュースが中心で、純粋な地方ニュースを書く機会は少ないはずですが、東京の紙面に載らない経験をしました。

もちろん、載っているものが相当あるので5種しかないという意見には組みませんが、わたしの経験からどんなニュースが東京に受け付けられないか、分析してみましょう。東京と大阪で、紙面扱いが著しく違うケースも含めて考えてみましょう

最近では、食べていると口の中の虫菌が減っていくキャンデー発売の話が、大阪、名古屋の社会面をにぎわせたのに東京では落ちました。発売元の製菓会社は東京、虫菌を減らす物質をつくったのは三重のベンチャー企業なので、むしろ東京がご当地もののケースです。筑波にある企業の研究所が新しい、物理学的にも面白いタイプの超音波モーターを開発して、東京で発表したケースも、大阪のわたしが取材して大阪から出稿すると、東京では落ちてしまいました。こうした例を見てお分かりの通り、地方のニュースだから、東京紙面から落ちてしまうのではないのです。どちらのケースも、なぜ載せてもらえなかったかまでは確認していないので、ここからは推測です。

東京には、大阪にない政治部、外報部を含めて、強力な、原稿をたくさん出せる出稿部が揃っています。原稿が不足気味なときはかまいませんが、紙面の大きさに比べて、溢れているときには、よそから送られて来た記事は、話題になる「面白さ」より、よほど「重要」と考えられなければ、総合面のぶんどり合戦から振り落とされてしまいます。わたしの同期生も各部で中堅になっています。紙面の割り振りに権限を持つ整理部の仲間が教えてくれたところでは、こういうときに顔が利くのは、もし原稿が不足した際に、さっと、引き出しから用意のストック原稿を持ち出してくれる有力な部といえます。それも、最終折衝をする責任者同士の「顔」、つまり、人間関係のようなものが大きいようです。

また、東京の社会面は東京社会部が記事の選択に権限を持つので総合面よりももっと、東京社会部以外の出稿記事が入り込みにくくなります。心筋こうそくに及ぼす、高血圧、高コレステロール、たばこ、それに酒の影響を、大阪府立成人病センターが大規模な疫学調査をしてまとめた結果を、社会面に出したことがあります。これも見事に東京では振られました。危険度が何倍と、内容が分かり易いし、一般の関心が高いテーマですが、これが落ちた原因は、大阪の地方機関がやった地方ネタと思われたからでしょう。ところが、この種の疫学調査では、ここが国内で第一人者なのです。東京しか知らないとい何でも東京に中心的な機関があると錯覚してしまうよう

です。

どうにも面白さが分かってもらえないケースもあります。関西電力の原発で続出した、蒸気発生器の取り付け金具脱落事故の原因が、日本側が製造元の米社の図面を信頼してぎりぎりの付加金具を付けたためで、しっかりたっぷり溶接すればいいと考える米国側と、何としても図面どおりに仕上げるのが当然とする日本側双方の職人気質の差が遠因になった話は、東京に載ったべた記事では理解出来なかったでしょう。米国のコピーから脱却し切れていない日本の原発技術を知っていれば、単純なミスでは済まない示唆的な問題点を含んでいます。明治時代の電柱を掘り起こして焼こうとすると燃えにくかった経験から、京大木材研究所が簡単な処理で燃えず、腐らない木材を開発した話も、べた記事でつまらなくなっていました。

それでも、大阪から出稿している分はまだいいようです。問題はいわゆる東京圏の外にある東京本社管内で、このニュースは、堺屋さんの指摘通りかもしれません。原発を例にとると、東京の読者には、関西電力や九州電力の原発ばかりで、事故、異常が起きているように見えているのではありませんか。福島原発や浜岡原発は何にも紙面に現れません。もちろん、各地方版では報じられているのですが、総合面には出ません。大阪本社が、原発の異常を総合面で扱うのを原則としているのと比べて対照的です。大阪や九州が出した記事は東京にもかなり出るので、上のような印象になってしまうのです。重要でない事故は載せなくてもとの議論もあります。しかし、例えば、今年の浜岡原発での無停電電源の故障による再循環ポンプの同時故障は、わたしには見過ごせない事故でした。原子力発電ボードのNo. 187に引用した科学面記事の通りです。東京本社が、この事故を本格的に扱い始めたのは、わたしの記事が出てから、というのでは堺屋さんのように言われても反論しにくいというものです。

新聞記者になりたてのころ、地方で、「大阪紙」と呼ばれてどうにも違和感がありました。わたしは「全国紙」だと思っていたのですが、ここに述べた現状をみれば、「大阪紙」であり、「東京紙」であるというのが適切なのかもしれませんね。お分かりになったと思いますが、このシステム、単に地域の問題でなく、運営する人間に染み付いたものです。しかし、結果としては、現在の「全国紙」は往々にして、「重要」な中央官庁発表物、統計物が幅をきかせる紙面になってしまうのです。

では、地方というものは、全国紙にとってそんなに疎遠なものでしょうか。少なくとも記者個人にとっては、そうではないと思っています。朝日の記者教育の原則では、記者はまず地方支局でサツ回りから始めます。今回は、その思い出話をしてみましょう。

.